

《論文》

保育現場における幼児の自己効力感及びと
保育士養成課程校所属学生の保育者効力感研究の概観

原口 恵

保育現場における幼児の自己効力感と 保育士養成課程校所属学生の保育者効力感研究の概観

原口 恵

抄録：近年の幼児教育への期待の高まりとともに、保育士や幼稚園教諭に対して保育及び教育の質の高さが求められている。そのなかで、幼児の活動に対する意欲の実態を把握し、幼児の日常に関わる保育者の資質について考察する必要があるように思われる。本稿では、現場における幼児の自己効力感及びコンピテンスについての研究と、幼稚園教諭や保育者を目指す学生の保育者効力感についての調査研究について概観した。幼児においては、自身の自己効力感及びコンピテンスを高く見積もる傾向にあることがいくつかの研究で示されていた。また、養成校課程の学生は、実習を重ねるごとに保育者効力感の質が変化していくことが示されていた。

キーワード：幼児、自己効力感、コンピテンス、保育養成

はじめに

子ども達が普段の活動においていかに意欲的に課題に取り組めるかは、保育及び教育の現場において重要な問題となっている。保育所や幼稚園に通う子供たちは、保育所や幼稚園における日々の活動をとおして、様々な活動を経験する。内容としては、たとえば身体運動であったり製作活動であったりと多様であり、子ども達はその時の課題目標をうまく達成することができる場合もあれば、達成できない場合もある。成功体験の多さが、その後の活動への動力となるため、「挑戦してみたら、できた」というポジティブな経験をなるべく多く与えることは保育や教育における重要な課題である。また、課題達成の成功や失敗に関わらず、保育士や幼稚園教諭の言葉かけの内容が、次の活動への意欲に大きな影響を及ぼすと考えられる。近年は幼児教育への期待の高まりとともに、保育士や幼稚園教諭に対して保育及び教育の質の高さが求められている。そのなかで、幼児の活動に対する意欲の実態を把握し、幼児の日常に関わる保育者の資質について考察する必要があるように思われる。

幼稚園教育における課題として、国全体での取り組みとしては以下の項目が関連している。幼稚園教育要領において示されているねらいでは、子どもの「生きる力の基礎となる心情、意欲、態度」が育つことを期待されており、健康、人間関係、表現、環境、言葉の各領域に示すねらいでは、「幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連を持ちながら次第に達成に向かうものである」としている。また保育所保育指針においては、その目標として「子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培う」ことが挙げられている。保育所や幼稚園教育の現場において、子ども達は保育者の考えるねらいや活動にもとづいた製作や身体活動などをとおし、様々な課題に取り組んでいる。これらをふまえ、幼児が様々な活動に意欲的に取り組んでいくためにはどのような関わり方が必要なのかを考えていくことが重要だと思われる。

私たちが何らかの課題に取り組む際に関与してくる重要な概念として、自己効力感及びコンピテンスが挙げられる。自己効力感（self efficacy）とは、Bandura（1977）によって提唱された概念であり、自身が行為の主体であり、直面した課題に対して望ましい対応をとることができるといった信念や確信のことである。自己効力感とは様々な課題の遂行における基礎となると考えられており、Bandura（1977）は、人が行動を起こす際に、その行動をできるかどうかという期待である「効力期待」と、ある行動がどのような結果をもたらすかという期待である「結果期待」の2つを挙げている。この二つの期待が区別されているものであるため、ある行動が何かしらの結果をもたらすことがわかっていても自身の行動に結びつかないという状況を説明することができる。またBandura（1977）は、自己効力感を高める要素として、遂行行動の達成、代理的経験、言語的説得、情動喚起の4つの情報源を挙げている。遂行行動の達成とは、自分が何らかの行動を生起させ、目的を達成できたという体験を得ることであり、逆に失敗経験は自己効力感を低下させると言われている。代理的体験とは、自分以外の誰かが行動して、成功している様子を観察することである。言語的説得とは自分に課題を達成させる能力があることを言葉で説得されることであり、周囲の人間からの勧告や自己教示などを指す。情動喚起というのは、気分の高揚によって成功への期待が高まることである。これらは保育の現場において幼児が活動する中でも得られるものであると考えられる。たとえば榊原（2006）では、幼児の数的能力を支援する活動として、歌や製作、出欠の確認などが挙げられており、普段の生活の場面で数的支援の活動が多い幼児は数的能力が高かったことを示している。このことから、体系だった指導の他にも、子どもの様々な能力を促進する支援の在り方があることが示されているように思われる。もちろん、単なる活動としてそれらを行うだけではなく、そこでは、子ども達がやる気を持ち、積極的に活動できるように促すような保育の在り方が重要だと考えられる。特に自己効力感を変化させる要因の一つとして言語的説得が挙げられていることから、保育者からの激励やポジティブな評価は、子ども達が活動する際の意欲に重要な役割を担っていると思われる。また、高田（2010）は4歳から6歳の幼稚園児の社会的比較について行動観察による検討をおこない、結果として他者への関心は年齢が上がると増加していき、特に女兒において顕著になるということが示されている。幼稚園や保育所では基本的に集団での活動であり、モデルとなる対象を見つけやすいため、代理的体験も重要な要素となると思われる。

一方でコンピテンス（competence）とは、White（1959）が有能感の動機づけの側面を強調した概念として用いられている（二宮, 2013）。コンピテンスは効力感とも呼ばれ、自身の活動が環境を思いどおりに変化させることができるという信念のことを指し、内発的動機づけの核となるものである。中澤・泉井・本田（2009）によると、私たちが環境へ働きかけることによって何らかの効果的な変化が起こった際に生じるものがコンピテンスであり、これによって自己の有能さを追求していくと述べている。子どもたちが自身の行動によって、満足のいく結果が得られた場合に喜びを感じ、さらなる行動への意欲を持って環境に働きかけることとなる。また、コンピテンスの低下は学習性無気力（Seligman & Maier, 1967）とも関連している。学習性無気力とは、ストレスを自分で取り除くことができない状態が長く続くことで、「何をしても無駄だ」といったように、自身の行動が環境に対して何の変化ももたらさないことを学習し、より難易度の低い他の課題への意欲も失われてしまう現象のことである。保育場面における子どもを観察すると、積極的に活動に取り組む姿も見られる一方で、なかなか活動に入り込めない様子も時に見られる。活動の難易度が高かったりその子にとっての不得意な領域だったりすると、活動への意欲を高められない場合もあるだろうが、そのような場面においていかに保育者が子どもの内発的動機付けを高めていけるかが重要になってくると思われる。そこで本稿では、日本の保育現場における幼児の自己効力感及びコンピテンス研究と、幼稚園教諭や保育者を目指す学生の保育者効力感についての調査研究を概観し、保育の質向上のために保育士や幼稚園教諭を養成する機関がどのような役割を担っていく必要があるかということを考察する。

幼児の自己効力感及びコンピテンス

ここでは、保育現場における幼児の自己効力感及びコンピテンスについての研究について述べる。幼児を調査対象とした場合は成人と違い言語による反応を得にくいことから質問紙調査は困難であるが、Harter & Pike (1984) は幼児及び小学校低学年の児童（4歳から7歳）を対象に、描画を用いた個人面接法を採用しており、回答を言葉でうまく伝えることができない幼児からでも反応を得ることができている。刺激材料としては、たとえば友達と一緒に遊んでいる場面と一人で遊んでいる場面が一枚のカードに描画されており、それぞれの絵の下には大きい円と小さい円が描かれている。面接においては、幼児に対してどちらが自分の状況に似ているかということと、それがどのくらいの頻度で生じているかを円の大小で選択するように教示している。桜井・杉原（1985）は同様の手続きを用い、日本の幼児の有能感や受容感について検討している。幼児のコンピテンスを測定する尺度としては、松田・鈴木（1985）がHarter（1980）による幼児用の尺度を基に改良を加えたものがある。領域としては、「数をたくさん数える」や「ひらがなをたくさん書ける」といった認知能力、「汚れた衣服は自分で着替える」などの社会的（自立的）能力、「遊び場でいつも友達がいる」という社会的（対人的）能力、「靴のひもがうまく結べる」や「ブランコがうまい」などの身体的能力、「難しいことをやり通す」などの一般的自己価値づけという5つの因子によるものであり、各領域において7つの質問項目からなる計35項目の尺度が作成された。

中澤（1995）は幼稚園の年中及び年長の幼児（4歳児及び5歳児）と小学校3、4、5年生の児童（9歳から11歳）を対象とし、Wheeler & Ladd（1982）が開発した社会的自己効力感尺度（Children's Self-Efficacy for Peer Interaction Scale）を用いて対人関係の場面における自己効力感の発達的变化を検討している。結果として、幼児の社会的自己効力感に比べ児童の社会的自己効力感が有意に低いことを明らかにした。このことから子どもは幼児期から児童期に移行していく中で自己認知能力が高まり自身を客観的にとらえることができるようになっていくことが示唆されている。また、4、5歳児においては学習面の効力感と社会面の効力感とが区別されていることが示唆されている。

また、柴田（2005）は、幼児の自己効力感と対人関係の関連について検討している。まず、面接法では桜井・杉原（1985）の社会的受容感尺度の中から仲間からの受容感項目を提示場面として使用している。次に、対象となった幼児の行動観察をおこない、自己効力得点と対人関係の関連性について検討している。その結果、自己効力感が高いほど対人関係に積極的であることが示された。さらに、中澤・泉井・本田（2009）は、学習面、運動面、仲間からの受容の3領域の課題を幼児に行ってもらい、幼児が課題に対して自身が抱く有能感と実際の遂行能力との関連を検討している。その結果、実際の遂行能力に関わらず、幼児が感じている有能感が非常に高いことが示されている。

保育者効力感研究

ここでは、現場において保育を実践している保育者の能力に焦点を当てた効力感について述べる。子どもの教育に関わる際、教師として子どもの学習に良い影響を及ぼすことができるという信念は教師効力感と呼ばれている（Ashton, 1995）。教師効力感を保育の場面に適用したものが保育者効力感と呼ばれ、保育の場面において、自身の行動が子どもの保育に良い影響を与えることができるという信念のことを指す概念として定義されている。三宅（2005）のレビューによると、保育の現場における効力感についての尺度は三木・桜井（1998）によって初めて開発されたと述べられている。近年の保育者効力感研究は保育士や幼稚園教諭の職場でのストレスとの関連で検討されている（西坂, 2002；池田・大川, 2012）ものと、保育者を目指す学生においてどのように保育者効力感が形成あるいは変化しているのかを検討したもの（森野・飯牟礼・浜崎・岡本・吉田, 2011；森）がある。本稿では、学生の保育者効力感の変化に注目して概観する。

三木・桜井（1998）は保育専攻短大生に対し、幼稚園実習及び保育所実習が保育者効力感にどのように影響するのか、保育者効力感尺度を用いて検討している。尺度項目の内容としては「私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う」といった保育指導方法に対する項目や「私は、保護者に信頼を得ることができると思う」といった保護者対応への項目などがある。また、反転項目として「私は、やる気のない子どもにやる気を起こさせることはなかなか難しいと思う」という項目などがある。結果としては、幼稚園における実習成績と保育者効力感の間に有意な正の相関が得られたことを示している。さらに、幼稚園実習における「実習園との合致感」が保育者効力感に大きく影響していることを明らかにしており、実習先の雰囲気や保育方針が、学生が実習前に期待していたものと合致しているかどうかや、実習に楽しみを感じながら取り組めたかどうかが重要な要素となっている。

保育者養成課程の学生における保育者効力感の発達については、三木・桜井（1998）の尺度を使用し調査が中村（2006）によって行われている。結果としては、1年次の初めからはいったん低下し、2年次の終りに向かうにつれて上昇していく傾向が示されている。また、森野・飯牟礼・浜崎・岡本・吉田（2011）では、2年制保育者養成校在籍の保育専攻の1年生及び2年生に対して約10ヵ月間の縦断的な調査を行っている。その結果、保育者効力感は1年次では段階的に低下の傾向が見られ、2年次では実習を終えるごとに段階的に向上していることが示されており、これは中村（2006）の結果と類似した結果である。また、保育者効力感の変化の要因として挙げられた自信経験や自信喪失経験の記述を分類し、1年次には実習の経験が少ないことから来る「夢見る保育者効力感」が、実習を重ねるごとに失われ、かわりに自身の能力をより客観的に見積もることから来る「身の丈効力感」への変化していくことが示されている。

幼児にとって保育所や幼稚園は自身の所属する集団の一つであり、普段の活動をとおして保育士や幼稚園教諭との関係を確立していく。自身が不安になったり恐怖に陥ったりするような場面においては、信頼関係が確立された大人へ助けを求めることがしばしば見受けられる。保育所での保育及び幼稚園での教育の場面においては、教師の言葉かけが子どもたちの行動に大きく影響すると考えられる。たとえば田中（2013）は、幼児が園で活動するなかで遭遇するつまづき場面において、幼児が情動調整をおこなうにあたっての幼稚園教諭の言葉かけについて、観察及びインタビューによる調査を行っている。その結果、肯定的な言葉かけだけではなく、教師の「突き放す行動」が幼児の混乱の落ち着きや情動の出し方の転換といった変化をもたらしていることを明らかにしている。このことから、常にポジティブな言葉かけをするだけではなく、時には厳しく聞こえるような言葉かけも、子どもにとっては自身の行動の変化を生じさせる契機となりうるのである。このように保育者の言葉かけが幼児の行動に大きく影響することから、保育者がいかに自信を持ちながら子どもたちと接することができるかが肝要となる。保育者の保育者効力感の向上も、今後の課題の一つとなるだろう。

まとめ

幼児の自己効力感及び効力感研究の結果からは、幼児は自己認知能力が低く自身を客観的にとらえることが難しいために、社会的自己効力感や有能感を実際の能力や教師からの評価よりも高く見積もっていることが示されている（中澤, 1995；中澤・泉井・本田, 2009）。その一方で、柴田（2005）で示されているように、自己効力感の高さが実際の対人関係における積極性に関連していることから、幼児の自己効力感は全体として高い傾向にはあるものの、同年齢の幼児の間には程度の差があり、それに応じて自身の行動も異なってくることが考えられる。いずれにしても、子どもの行動を客観的にとらえる視点と、状況に応じた言葉かけが必要だと思われる。

保育者効力感の研究については、三宅（2005）によると、教育者効力感研究に比べ数が少なく、今後の発展が望まれる領域であることが述べられている。前述したように、子どもが意欲的に活動に取り組むためには、保育者による子どもの実態把握が必要不可欠となる。保育者養成機関には保育能力の高い人材の養成が必要とされている。できるだけ長く働き、保育や教育の資質向上が見込めるような人材を養成することが、養成機関

における重要な役割となっている。その役割を果たすためには、養成機関に在籍する学生自身が、普段の授業や実習をとおして現場で働く際の自信や意欲を高めていけるような関わりかたが必要となってくる。養成機関における指導の在り方として、学生が保育者効力感をいかに養っていくかということも考える必要があるだろう。

引用文献

1. Ashton, P. T. (1985). Motivation and the teacher's sense of efficacy. In Ames, C. and Ames, R. (Eds.) *Research on Motivation in education: Vol. 2*, 141-174. Orlando, FL: Academic Press.
2. Bandura, A. (1977). Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191-215.
3. Harter, S. & Pike, R. (1984). The pictorial scale of perceived competence and social acceptance for young children. *Child Development*, 55 (6), 1969-1982.
4. 池田幸代・大川一郎 (2012). 保育士・幼稚園教諭のストレスが職務に対する精神状態に及ぼす影響：保育者の職務や職場環境に対する認識を媒介変数として. *発達心理学研究*, 23 (1), 23-35.
5. 神谷哲司 (2009). 保育者養成系短期大学生の保育者効力感の縦断的变化—実習時期と就職活動を通じた進路選択過程に着目して—. *キャリア教育研究*, 28, 9-17.
6. 厚生労働省 (2008). 保育所保育指針.
7. 松田惺・鈴木真雄 (1985). 幼児の効力感の測定：Harterの尺度に基づく. *日本教育心理学会総会発表論文集*, 27, 94-95.
8. 三木知子・桜井茂男 (1998). 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. *教育心理学研究*, 46 (2), 203-211.
9. 三宅幹子 (2005). 保育者効力感研究の概観. *福山大学人間文化学部紀要*, 5, 31-38.
10. 文部科学省 (2008). 幼稚園教育要領.
11. 森野美央・飯牟礼悦子・浜崎隆司・岡本かおり・吉田美奈 (2011). 保育者効力感の変化に関する影響要因の縦断的検討：保育専攻学生における自信経験・自信喪失経験に着目して. *保育学研究*, 49 (2), 212-223.
12. 中村多見 (2006). 保育学生の保育感（1）—保育者効力感の発達—. *高松大学紀要*, 45, 197-206.
13. 中澤潤 (1995). 社会的自己効力感の発達. *千葉大学教育学部研究紀要*, 43, 157-164.
14. 二宮克美 (2013). 自己効力（感）. 池田和博（編）、*発達心理学事典*, (pp.406-407). 丸善出版株式会社
15. 西坂小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス、ハーディネス、保育者効力感の影響. *教育心理学研究*, 50 (3), 283-290.
16. 榎原知美 (2006). 幼児の数的発達に対する幼稚園教師の支援と役割：保育活動の自然観察に基づく検討. *発達心理学研究*, 17 (1), 50-61.
17. 桜井茂男・杉原一昭 (1985). 幼児の有能感と社会的受容感の測定. *教育心理学研究*, 33, 237-242.
18. 柴田利男 (2005). 幼児の自己効力感と対人行動. *北星学園大学社会福祉学部北星論集*, 42, 11-23.
19. Seligman, M. E. P., & Maier, S. F. (1967). Failure to escape traumatic shock. *Journal of Experimental Psychology*, 74, 1-9.
20. 高田利武 (2010). 日本人幼児の社会的比較：行動観察による検討. *発達心理学研究*, 21 (1), 36-45.
21. 田中あかり (2009). 母親の情動表現スタイルが幼児の気質に及ぼす影響. *発達心理学研究*, 20 (4), 362-372.
22. 田中あかり (2013). 幼児の自律的な情動の調整を助ける幼稚園教師の行動：幼稚園3歳児学年のつまき場面に注目して. *発達心理学研究*, 24 (1), 42-54.
23. White, R. (1959). Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297-333.

Review of the self-efficacy in the small child and the pre-school-teacher-efficacy on the students in childcare training school

Megumi HARAGUCHI

The childcare worker and the kindergarten teacher are asked for the height of the quality of childcare and education with the rise of the expectation for early childhood education in recent years. The purpose of this study was to review the studies on self-efficacy and competency on small child and the studies on pre-school-teacher-efficacy on students of childcare training school. Some research showed that the small child overestimates own self-efficacy and competence. The pre-school-teacher-efficacy on the students in childcare training school changes in the quality with each practical training.

Key words: small child, self-efficacy, competence, childcare training